
ポーとぼく

ノダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポーとぼく

【Nコード】
N7388A

【作者名】
ノダメ

【あらすじ】
少年は、絵本の主人公と出会う。そして、光に包まれ本の中へ

第一話：本の中？

星の瞬くその町にひときわ目立つ怒り声は、町の一角にあるさびついた赤い屋根の家に住んでいる、マルク家の父親トンスの声です。

「どうしておまえは、ちゃんと学校にいかないんだ。町の子はみんな行っているのに。」

町の人々は、いつものことだとおもい、騒ぐことはありませんでした。

「父さんには僕の気持ちなんてわからないよ。わかれうともしないくせに。」

トンスの息子ミックは、泣きながら怒りました。ミックは、町の子供たちからいじめられていました。

ミックは、自分の部屋へ戻りベッドの上においてあった本を取りました。

本の題名は、「マシユマロ星人ポーの冒険」。

ミックはこの本が大好きで、とくに主人公ポーが愉快的仲間たちとのしそくに冒険しているところに、自分もいつかその仲間になりたいと夢を抱いていました。ミックは本を抱きしめました。

「僕にはポーがいればいいんだもん。だって、みんな僕のこといじめるんだ。」

その時ドアから母親マリアが入ってきてミックをやさしくだきしめました。

「無理して学校にいかなくてもいいのよ。ただ父さんは、あなたを心配して言っていることを忘れないで。おやすみ。」

マリアは、ミックに優しくキスをするとニコッと笑顔を見せて部屋を出て行った。

ミックが眠りにつき時計の針が真夜中の十二時を指した頃、突風が吹きミックの部屋の窓がガバッとあきました。部屋は星の光が眩いばかりに照らしベッドの上の本が風でピラピラと音をたてていまし

た。すると、

「ポー？」

本の中からなにやら白い生き物がでてきました。

「ポウポポ」

寝ているミツクに気が付くと気に入ったのか生き物は、ミツクを担いで本の中へスーっとはいっていきました。

起きたミツクが見た風景は、虹色のふかふかベッドに色鮮やかな形の変な料理、そして笑顔で見つめている白い生き物でした。どうやらここは、生き物の家のようなのである。

「君は、もしかしてマシユマロ人のポー？」

ミツクは、驚きの気持ちを抑えました。

「ポポ」ポーは、うなずくと喜びのあまりミツクに抱きつきました。するとミツクは、あまりのできごとに失神してしまいました。「ポポ？」硬直したミツクに気付いたポーは、心配になったのかミツクを担いで外にでました。

外の世界は、なんとも不思議な光景でした。

空の半分は、夜の月と星がみえていてあとの半分は、サンサンと輝く太陽と雲ひとつない青空がみえました。ポーの家は、どうやら町の中にあるらしく他の家も色とりどりの形です。中には、透明で、ひょうたんの形、家具まで透明なので中がまる見えです。町の住人まで色とりどりでいろんな顔の形をしています。

ポーは、三角つぼの形の家にはいつていきました。看板には、絵が書いてありどうやらここは、病院のようです。病院の中には、ぶきみな眼鏡と長く伸びた白い口ひげのはえた老人が立っていました。「ポーじゃねえか。どうしたんだ血相変えて。どうやらなにか担いでいるみたいだが？病人ならみせてみる。」

老人は、この町にはめずらしく人間で、どうやら医者のようなのです。ポーは、病院の中のベッドにミツクを寝かせました。ミツクはまだ失神したままです。

「おいポー、この子は、人間の子じゃないかどうしてここに？」

医者は、ミツクの容態をみながらポーに聞きました。

「ポ・ポ・ポ・ポー」

ポーは、うれしそうに答えました。

「なにー気に入ったからつれてきたー。」

医者がびつくりして大声をあげるとその声でミツクは、目をさました。

「起こしてしまったな、すまんすまん。私は、この町の医者ポッツじゃ。よろしくな。失神したばかりじゃからまだ横になつとれ。」
ポッツは、あやまりながらやさしく笑った。ミツクは、何か言いたそうにしていると、「ここは、絵本のなかじゃよ。君がここに来たのはポーが気に入って君をここにつれてきてしまったからじゃ。この町は、スウィーツポップという町で人間は、わし一人じゃ。これで、満足かな。」

ポッツは、ミツクの考えていたことを全部とってくれた。

「ん？今度は、なんでわかるんだとおもったじゃろ？わかるんじやよ。昔、わしがここにきたときも、そうおもったからの。」

ポッツは、満足そうにニヤッと笑った。ポーも、わかっているのかわからないが笑っていた。

ミツクは、なんだかわけわからず考え込んでいた。

すると、病院の入り口からいろんな生物たちが、がやがやと話しながらきた。

「新入りがきたって言うからよみんなつれて見に着ただだよ。」

マーブルキャンディ人がわくわく顔をうかべていた。

「この子は、まだ病人じゃ。そつとしといてやれ」

ポッツは怒りました。

ポーは、ミツクを心配そうに抱き起こして頭をなでていた。

「ぼくは、もう大丈夫です。ポーも大丈夫だから心配しないで。」

ミツクは、やっと心の整理ができたのか、なでていたポーの手を止めました。ポーは、まだ心配そうなまなざしで見つめていました。

「大丈夫だから。」

ミツクのその言葉にポーもポツツも安心しました。

「大丈夫そうだな。それなら今日は、歓迎会だ！言いわすれたけど俺の名前は、スカッチ、お前の名前は？」

スカッチは、マールでかわいい格好をしているのにワイルドだった。

「ぼくはミツクです。歓迎会ってぼくの？」ミツクは、不思議な気持ちになった。

「当たり前だろ他に誰もいないんだから。新しい友達ができれば歓迎するのがあたりまえだ。」

スカッチは、ミツクの質問が変に思ったのか笑い出した。

「お前、おもしろいやつだな気に入ったよ。じゃあお前は、歓迎会の準備をするからいくぞ、またあとで迎えにくるからよ」

スカッチは、口笛をふきながら町の人を手招きして病院をでていった。

「そう不思議な顔をしなさんな。スカッチも町の住人も誰か繰れば必ず受け入れてくれる。ここは、そういう町なんじゃよ。おまえさんがそんな顔しているとポーも落ち着かんよ」

ポツは、クスリと笑った。ミツクがポーを見るとポーは、心配そうにミツクをみつめていた。

ポーの心配をよそにミツクの心は、逃げ出したい思いでいっぱいになっていた。ミツクは、小さい頃から歓迎会のような催しものは、友達がいなかったために入っていけないので苦手だったのです。

「ぼくちよつと外を散歩してくる。」

ミツクは、みんなに黙ったまま家に帰ろうとした。もちろん帰り方などわからない。でも、なんとかかなると思っていた。

「歓迎会は、すぐあるからなあまり遠くにはいかないようにな。」

ポツは、何も疑うことなく送り出してくれた。ミツクが病院のそとにでるとポーが心配そうについてきました。

すると、

「ポー、ミツクを一人にしてやれ、一人になりたい時もあるんだ。」

ポッツが病院の中からポーに声をかけた。ポーは、それを聞いて「ポポ」

残念そうに肩をおとして病院の中に入ってしまった。

病院を後にしたミツクは、町の中をどこにいくかもわからずに歩いていた。その時、いろんな生物に声をかけられた。

「やあ、君がミツクだね。歓迎会は、たのしみだね」とか

「こんにちは、元気なさそうね、歓迎会がはじまれば元気になるわ。またあとでね。」

とかこの町は、本当にミツクを歓迎しているんだとミツクは思った。同時にもつとこの町のことを知りたくなった。ミツクは、来た道を戻ろうと思って後ろに向き直すと自分の来た道がわからなくなっていた。

「迷子になっちゃった。ここは、どこ？」

ミツクは、「またみんなに会いたい。」そう想ったら涙がでてきた。ミツクは、足をとめて泣きながら空を見るとさっきまで輝いていた星から小さな妖精ができて星にカーテンを掛けていた。他の星にもそれぞれ妖精が住んでいるのか、カーテンをかけていた。月を見ると美しい月の女神フロディーテがベッドで眠っているのが見えた。

月は、女神が寝ているせいか光が弱かった。

隣の空では、誰がかけたのか太陽にへんてこな布巾がかかっていた。ミツクは、涙がとまるほどびっくりしてしまいました。この町は、人も建物も全部変だけど空まで変だと思わなかったのです。

そうこうしているうちに

「おーい、おーい」

「ポーポー」

「ミツクどこだー」

ミツクを探すポーたちの声がきこえてきました。

ミツクが辺りを見回すと遠くの方にポーたちがいた。ミツクは、全

速力でポー達のところへ涙をいっばいためて走りました。

「なにしてんだよ、みんな探してたんだぞ。」

勝手に遠くに行くな。」

スカッチは、涙をながしながらミックを殴りその手は、震えていました。

そして、強くミックを抱き締めたのです。「ごめんなさい。」

ミックは、スカッチの腕の中で泣きながら小さな声で言いました。

「何より見つかってよかった。さあみんなで村に帰ろう」

ポツは、ミックの頭をやさしくなでました。

「ポポポポー」

ポーは、ミックをスカッチの腕から離すと誇らしげに肩車をしました。

ミックは、止まっていた涙がまた溢れてきました。みんなと一緒にいたいと心のそこからそう思ったのでした。

「おい。起きろ、ミック。村についたぞ」

スカッチの起こす声にミックは、目をこすりながら起きました。どうやらポーの肩の上で泣きつかれて寝てしまったらしい。周りを見ると村の人たちにミックは、囲まれていた。

「心配したぞ」

「どこに行っていたの。」

「怪我はしてない？」

「大丈夫？」

村の人たちは、ミックに声をかけて肩をポンとたたいたり、頭をなでたりした。

ミックは、その一つ一つの言葉に胸がいっぱいになった。

「さあ歓迎会をはじめろぞ」

スカッチが大きな声を合図に空にドーンと大きな花火があげました。

その大きな音に寝ていた星の妖精と月の女神は、目を覚ましました。星の妖精たちは、歓迎会を楽しむように星を揺らしていた。月の女

神は、優しいまなざしで月の窓辺からこちらを見つめていました。

第2話女神たち（前書き）

本の中へきてしまったミツクは、歓迎会で二人の女神にであいました。なにやら事件が・・・

第2話女神たち

歓迎会は、それはそれはなんともおかしなものだった。

「ほれ、これ飲んでみな。」

スカッチがなにやら変なものをもってきた。コップのなかを見ると天の川がみえました。

よく「星空ビールだうまいぞ。ただし酔っても体に悪くない、最高だ。」

スカッチは、グビグビ飲んでいるとボカッと杖で叩かれました。

「体に悪くないからって酔っていいわけあるか馬鹿者が。」

ポッツは、杖をふりあげて叩くのでスカッチは、ビールを飲みながら陽気に逃げています。

まるで、泥棒と追いかける警察官みたいです。

ミックはおなが、痛くなるくらい笑いました。そして、ミックの笑う姿にポーは、

「ポポポーポポ」

歌いながら踊りだしました。

その光景に、スカッチや街のみんなも踊りました。

踊っているうちにみんなは、円になった。

その時、円の中心に突然、炎が降ってきた。

みんな、その炎に腰を抜かした。

酔いつぶれたスカッチも我に返っていた。

炎は、やがてメラメラと音をたてながらかたちを変え、やがて太陽の女神ジャンヌが現れた。

見物していた星やアフロディーテたちは急に、カーテンを閉ざした。

ジャンヌは、赤いバラのように美しくもちからずよい感じの女神でそのドレスは、真っ赤なルビーのような炎がメラメラと怒りを表す

かのようにだった。

「うるさい。人が寝てるときは、静かにしなさい。だいたいあんな変な布を私の星にかけないでくれる。私の星が汚れるわ。」

メラメラと怒り出すジャンヌにスカッチは小さな声で

「うるさいのは、そっちだ。静かにしてても起こるし歓迎会を静かにやるほうがむりなんだよ。」

その声にジャンヌは、気がつきました。

「スカッチ、なにかあるならいいなさい。」

するとスカッチが何か言おうとしたその時、

「ポポポー」

ポーがジャンヌにバシャッと水をかけたのです。

その水は、すぐに煙となり蒸発してしまいました。

「水をかけないで。ポー、やめなさい。」

そういつて逃げるように炎に形を変えて太陽へと帰っていきました。

第2話女神たち（後書き）

これからまだいろいろあるのでおたのしみに！

第3話ジャンヌの復讐（前書き）

- ・ 村から逃げたジャンヌは、怒りがおさまらず復讐をくわだてるが・・

第3話ジャンヌの復讐

太陽へと、帰ったジャンヌは怒りがおさまらず、太陽の炎をメラメラと燃やしポップ村を熱く照らした。

布から太陽の光が漏れてやがて布は、熱さにまけて溶けていきました。

「ポップ村のやつらめ、蒸し焼きにしてくれるわ」

ジャンヌは、鼻をツンとたてると太陽から村の様子をうかがっていました。

ミツクと村の人々は、楽しさのあまりどんどんあがる温度に気付かず、踊りや歌を楽しみました。その間、お菓子でできたかわいらしい形の家はポタポタと音をたてながら溶けていきました。

「なんか、熱い。」

だらだらにかいた汗を拭きながら、ミツクは辺りを見回しました。

気付くと村の人々は、ポップ以外溶けて小さくなっていたり、こんがり狐色に焼けていて良い香をかぐわせいたりしていました。

「まずい！みんな、日陰に非難するんだ溶けちまうぞ。」

ポップは、小さくなった村人たちを日陰に非難させました。ポーは、なにやら口からマシユマロをいっぱいだしています。どうやらテントをつくっているようです。

ミックも、マシュマロテント作りを手伝いました。

やがて大きなマシュマロテントが完成するとポーは、安心して気が抜けたのか酸欠をおこして目をくるくる回しながら倒れてしまいました。

「よくやったな。ポー、ミック。偉いぞ。」

ポッツはやさしく笑い、ポーをテントの中に寝かせました。村の人々とミックもテントの中へ非難しながらポーの作ったマシュマロテントの焼ける甘い香をたのしみました。

第3話 ジャンヌの復讐（後書き）

まだまだ修業の身です。評価と感想をできたらおねがいします。

第4話 奇跡の水（前書き）

復讐に燃えたジャンヌは、村を太陽で照らしつづけた

第4話 奇跡の水

やがてほつとしているのもつかぬま、甘い香はにがみのあるこげた匂いへとかわりました。

マシユマロテントはやがて焦げあとからボツと火がつき、そして炎となつて非難していたミツクたちを襲いました。

ポツツとミツクは、荒々しい炎の中、小さくなつた村の人々を抱えてテントの外へと非難しました。

「これで全部非難できたか？」

ポツツは、ミツクに確認するとミツクは、ザッパーンと水をあびた

「まだポーが中にいる助けにいつてくる」

ポツツは、ミツクを止めようとしたがミツクは、炎の舞うテントの中に入つていつてしまった。

そのころジャンヌは、太陽から町を見て嘲笑っていた。

「いいきみ。二人とも私の美しい炎に焼かれて死んでしまえばいいわ。」

ポツツは、祈りました。

「どうか二人を助けてくだされ。奇跡よおこつてくれ。」

その時、大量の水がザッパーンとマシユマロテントと太陽にふりかかったのです。

ポツツは、あまりの急な出来事にビクリして腰がぬけてしまいました。水は、湯気をたてて蒸発しながらも太陽に浴びせつづけ太陽

は、ジャンヌを守るように炎を強めた。

水と火の戦いはじまった。

水のおかげでテントからずぶ濡れになったミツクとちよつと焦げたポーがでてきた。

そして二人の前に美しい木々のざわめきを奏でる緑のドレスを着た大地の女神があらわれました。

「手当てをしてあげます。怪我人をこちらへ」

大地の女神は、手に光をやどすとその光をミツクたちにふりまきました。

するとみるみるうちにみんな火傷はなおり、疲れ切っていたのにハキハキ元気になりました。

そしてつぎに大地の女神は、木々を生やして日陰を作ってくれました。

第4話 奇跡の水（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。

第5話 別れ（前書き）

水と火の戦いは、どちらが勝つのか？

第5話 別れ

数時間の時が流れ、水と太陽の戦いはまだ、続いていました。
大地の女神は、心配そうに見つめていました。

「あれは？」

ポツは水を指しました。

滝のように流れる水を中心に女神が見えました。
水の女神セレーヌです。

「いいかげんにしなさい。」

セレーヌの一言でジャンヌは、太陽の火をとめました。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない。帰ればいいんでしょ。」

ジャンヌは、太陽へ逃げるように帰っていきました。セレーヌもジャンヌの後ろ姿を見届けると水に溶け込むように消えていきました。

「やはりジャンヌは、セレーヌが怖いよね。」

みんな、もう大丈夫よ。」

大地の女神の声にみんな飛び跳ねて喜びました。
ミックもポーもよろこんでいると、ミックの体が透明に輝きだしたのです。

「元、居るべきところに帰る時間がやってきたみたいですね。」

大地の女神がそうミックに告げるとミックは、黙ってうなずき目に

涙をいっぱいためながら

「ここに来てよかった。みんな、さようなら。」

そして最後にミックは、ポッツやポーと抱き合つと泡のように消えていきました。

家に戻つたミックは、びっくりしました。全部夢だったのだと思いました。そして、すぐに絵本を開きました。そこには、ポーやみんなと一緒にいる幸せそうな自分の姿が描かれていました。

終

第5話 別れ（後書き）

最終話です。ありがとうございました。なっとくいかなかったらすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7388a/>

ポーとぼく

2010年10月21日02時39分発行